

那珂川町図書館

オススメの1冊

『広辞苑をつくるひと』 三浦 しをん／著 岩波書店 【813.1 ミ】

今年の1月、岩波書店より『広辞苑第七版』が刊行されました。10年ぶりの大改訂ということで、私たちが想像するよりも多くの人々が、長い年月をかけ刊行までの道のりを歩んできたことが伺えます。しかし、私はある1冊の本を読むまでは“辞書作り”の過程に対して、ここまで深く感じることはなかったように思います。今回紹介する本は、『広辞苑をつくるひと』という1冊です。この本は、代表作に『舟を編む』が挙げられる作家の三浦しをんさんが、広辞苑第七版の刊行に携わった人々へ取材を行い、インタビュー形式でまとめられた1冊です。

では早速、内容を一部紹介します。まず、“見出し語や語釈”などを検討した人々についてです。見出し語というのは、簡単に言うと「言葉」のことであり、語釈は「その言葉の意味や解釈」です。改訂にあたり、検討を行ったのは「国立国語研究所」という研究機関です。検討していく上では、動詞、オノマトペ、百科項目など様々なチームに分かれて検討が行われたそうですが、この本では「動詞の語釈」を検討したチームの取材について取り上げられています。今回の改訂で検討が必要だった動詞は、六千語強あったようですが、それらを2年間ほどで検討する必要があったそうです。チームの方々は、他の業務と同時進行で検討を行う毎日だったものの、もともと辞書や国語学の研究を行う辞書好きが集まるチームだからか、苦痛だと感じることなく2年間検討し続けることが出来たそうです。そして、語釈を検討する際は、「なるべく短く、端的に」をポイントに「語釈に出てくる単語が分からず、また辞書を引く必要があるくらい難しい単語は使わない」ことを考えながら進めていたそうです。このように、広辞苑における主役といえる“見出し語や語釈”の検討の現場では、一語一語、他の見出し語とも比較しながら検討が行われていたようです。

このほかにも、広辞苑では初版から使われている“秀英体”という書体の検討・図版の検討・広辞苑が収納される函（はこ）作り・製本作業などの様々な現場でそれぞれ携わっていた人々に取材した様子が、この1冊にまとめられています。

辞書作りと聞くと、堅苦しく、難しい印象を持ってしまうかもしれません。しかし、この本を読むと1つの辞書を作るために自身の仕事に誇りを持ち、楽しみながら辞書作りに全力を注ぐ人々がいることが分かります。ネット社会となり、知らない単語をすぐに調べることが出来るようになった今だからこそ、この1冊を読むことで、紙媒体で物事を調べる大切さや楽しさについて感じてみませんか。

那珂川町図書館（野帳）